



Title	高齢者が示す多様なエイジズムの実態と背景メカニズムの検討
Author(s)	菊地, 亜華里
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101587
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名（菊地亜華里）	
論文題名	高齢者が示す多様なエイジズムの実態と背景メカニズムの検討
論文内容の要旨	
<p>第1章 序論</p> <p>年齢を理由とした差別は「エイジズム」と呼ばれ、主に高齢者への差別として扱われてきた。ただし、近年では、若者へのエイジズムや高齢者間のエイジズムなども問題視されている。このような多様なエイジズムがみられる背景には、年齢という属性の性質上、人々が差別する側から差別される側へ徐々に移行するというエイジズムの最大の特徴がかかわっていると考えられた。差別される側への移行に直面する高齢者は、自尊心を維持するために一連の心理プロセスで対処していると考えられ、その過程で高齢者が主体の多様なエイジズムが観察されていると予想された。第一に、高齢者は自分が高齢者であることを否定し、自分以外の高齢者を外集団とみなしてエイジズムを示すと考えられた（他者を否定するプロセス）。第二に、高齢者は自分が高齢者であることを自覚し、自分自身を含む内集団としての高齢者集団にエイジズムを示すと考えられた（自分を否定するプロセス）。第三に、高齢者は自分たちを若者よりも優れた集団であると認識し、外集団としての若者に対してエイジズムを示すと考えられた（自分を肯定するプロセス）。本研究では、高齢者が示すこれら3つの形態のエイジズムに焦点を当て、その実態と心理的メカニズムについて明らかにすることを目的とした。</p>	
<p>第2章 外集団である高齢者へのエイジズムの検討</p> <p>研究1では、高齢者が他の高齢者に対して示すエイジズムについて検討した。背景メカニズムとして、他の高齢者を自分と区別して否定的態度を示すという、他者を否定するプロセスを仮定した。このプロセスでは、差別される側へ移行することへの不安（つまり、加齢への不安）が要因となってエイジズムが生じると考えられ、より高齢であるほどその関連が強くなると考えられる。そこで、本研究では、加齢への不安とエイジズムの関連の年齢差について、研究知見が豊富なアメリカと、長寿国であるが研究の蓄積が乏しい日本のサンプルで比較することを目的とした。アメリカ（18-75歳、n = 886）と日本（20-75歳、n = 556）で実施したオンライン調査の結果から、アメリカの参加者では不安とエイジズムの正の関連が高齢者のみでみられたが、日本の参加者では年齢に関係なく不安とエイジズムの正の関連がみられた。これらの結果から、日本の場合、高齢者のエイジズムの背景メカニズムとして予想された他者を否定するプロセスが、年齢にかかわらず当てはまることが示唆された。</p>	
<p>第3章 内集団である高齢者へのエイジズムの検討</p> <p>研究2では、高齢者が自分自身を含む高齢者に対して示すエイジズムについて検討した。背景メカニズムとして、自分が持っている高齢者へのステレオタイプに沿って、自身を過小評価したり行動制限をしたりするという、自分を否定するプロセスを仮定した。本研究では、高齢者が内集団へ示すエイジズムについて、他の年齢層との違いや外集団へのエイジズムとの関係性を明らかにすることを目的とした。18-100歳（n = 4974）を対象に、若者/高齢者への肯定的/否定的態度を尋ねた。因子分析の結果、70代以下の高齢者では、「若者への否定的態度」と「高齢者への否定的態度」が独立して抽出されたが、80代以上の高齢者では、若者や高齢者といったエイジズムの対象集団によって態度が区別されなかった。また、70代以下の高齢者では「高齢者への否定的態度」の得点が「若者への否定的態度」の得点より低く、その差はすべての年代の中で最も顕著であった。これらの結果から、高齢者のエイジズムの背景メカニズムとして予想された自分を否定するプロセスは、若い高齢者においては当てはまるものの、より高齢な年齢層には当てはまらない可能性が示唆された。また、若い高齢者の場合も、自分を否定するプロセスより他者（若者）を否定するプロセスの方が顕著であることが示唆された。</p>	
<p>第4章 外集団である若者へのエイジズムの検討</p>	

研究3では、高齢者が若者に対して示すエイジズムについて検討した。背景メカニズムとして、高齢者の優れた側面に焦点を当てて若者よりも優位に位置付けるという、自分を肯定するプロセスを仮定した。本研究では、高齢者が自分を肯定するプロセスがみられる具体的な評価側面および比較対象を明らかにすることを目的とした。高齢者から若者へのエイジズムとして、現代の若者を一括りにして批判する「最近の若者効果」に注目し、73-79歳の高齢者 ($n = 390$) が「昔（自分が若かった頃）の若者」、全般的な「若者」、「最近の若者」に対してもつイメージを比較した。分析の結果、高齢者は若者のイメージを、能力や活発さといった印象全般を評価軸とした「力量性・活動性」と、謙虚さや勤勉さといった社会的規範を評価軸とした「評価性」の2側面から評価しており、特に「評価性」において昔の若者を他の若者と比べて肯定的に評価していることが明らかとなった。これらの結果から、高齢者が自分を肯定するプロセスは、現在の自分にとって強みである側面において、過去の自分を肯定するプロセスとして顕著にみられることが示唆された。

第5章 総合考察

本研究では、高齢者がエイジズムを示す3つの心理プロセスについて検討した。研究1から3を通して、同年代（70代）の高齢者の間ですべての形態のエイジズムが観察されたことから、高齢者が示すエイジズムは同時に複数のプロセスで生起していることが示唆された。つまり、高齢者は、その時々の状況や環境に応じて特定の年齢集団に対して回避的あるいは接近的になりながら、自尊心を維持していると考えられた。また、日本の場合、他者を否定するプロセスは若者と高齢者で共通していること（研究1）や、より高齢な年齢層では特定の対象へのエイジズムが観察されなくなること（研究2）が示唆された。一連の研究から、高齢者が示す個々のエイジズムについて詳細に検討していくことの重要性が確認された。それと同時に、個別に得られた知見を統合し、体系的な理解を進める必要性も示された。本研究の限界として、限られたサンプルで3つのエイジズムを個別に検討するにとどまった点が挙げられる。今後は、サンプルを拡大し、個人内でみられる複数のエイジズム間の比較やそれぞれのエイジズムの縦断的変化について検討する必要がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(菊地亜華里)		
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授	権藤 恭之
	副査 教授	入戸野 宏
	副査 准教授	中川 威

論文審査の結果の要旨

年齢を理由とした差別は「エイジズム」と呼ばれ、主に高齢者に対する差別として研究されてきた。近年、エイジズム研究では、高齢者が若い年齢層や自分より高い年齢層に向けるエイジズムが注目されている。本研究は、高齢者が示すこれらのエイジズムに焦点を当て、その実態と背景にある心理的メカニズムについて検討している。

研究1では、高齢者が外集団である他の高齢者に対して示すエイジズムについて検討している。加齢への不安とエイジズムの関連の年齢差について、研究知見が豊富なアメリカと日本を比較し、アメリカでは、高齢者が示すエイジズムが低いという、従来の結果を再現したのに対して、日本では年齢に関係なくエイジズムのレベルが中程度にあり、さらに加齢に対する不安とエイジズムの関連がみられた。このことから日本では特に高齢者が自分よりも高い年齢の対象者を外集団として否定するプロセスがエイジズムを生起する心理的な要因として存在することが示唆された。

研究2では、自らが持つ高齢者へのステレオタイプに基づき、自身を過小評価したり、行動制限をしたりするという、高齢者が高齢者である自身へ示すエイジズムについて検討した。自らが開発したエイジズム評価尺度を因子分析した結果、70代以下の高齢者では、若者と高齢者を対象とした「否定的態度」が対象年齢で独立して観察されたが、80代以上の高齢者では、1つの因子としてまとまり、高齢になるにつれて、自らを否定するというエイジズムは減弱することが示唆された。

研究3では、高齢者が若者に対して示すエイジズムを検討した。「最近の若者」と自分自身の過去である「昔の若者」という異なる対象に対するイメージについてSD法で分析した。その結果、謙虚さや勤勉さといった社会的規範を評価軸とした「評価性」という因子で、「昔の若者」を高く評価していた。このことから、高齢者が若者を評価する際に、現在の自身の強みを過去の自分に投影し、比較する傾向があることが示唆された。

以上、一連の研究で得られた成果から、高齢者が示すエイジズムは単一ではなく、複数のプロセスから年齢とともに比重を変えながら生起していることが示唆された。また、本論文で提案された高齢者のエイジズムの生成過程に関する仮説は、エイジズムという現象を解明するための新たな視座を与えるものであったと評価できる。

審査の結果、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいと判定した。